

空に輝く音速の矢（ソニックアローズ）

ノア（マウントベアーの熊の方）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アプリゲーム、『Gunsip Sequel：WWII』で飛行するプレイヤーたち。

そのゲームのプレイヤーのグループがあるSNS、『Lobi』。

そこでアクロバット飛行チームをしている、『第6航空団 第20

1飛行隊』、通称『ソニックアローズ』。

そのプレイヤーたちの物語。

ソニックアローズの隊長も同じ設定、同じキャラで別の話を別サイト様ですが書いております。

良ければそちらもお願いします。 <https://www.alphahapolis.co.jp/novel/383597102/>

575339145

※キャラはTACネーム以外、プレイヤー名、Lobi名、リアル氏名には全くの無関係です。

主人公の秋本のみ完全オリジナルのキャラとなります。

メインで書いてるわけでもなんでもなく、舞台となつたメンバーなどで楽しむために書いているため投稿は不定期、尚且つ低クオかもです。

目  
次

キャラクター設定（隨時更新）

|     |                |
|-----|----------------|
| 第1話 | キヤラクター設定（隨時更新） |
| 第2話 |                |
| 第3話 |                |
| 第4話 |                |
| 第5話 |                |
| 第6話 |                |
| 第7話 |                |
| 第8話 |                |

34 30 24 21 18 14 11 6 1

## キャラクター設定（随時更新）

『空に輝く音速の矢（ソニック・アローズ）』

名前：秋本 汐梨（あきもと しおり）

性別：女

年齢：24

TACネーム：Tido

階級：一尉

性格：明るく優しい

一人称：私

見た目：茶色のショートボブ

設定：新しくソニックアローズに着任してきたパイロット。  
ポジションは4番機。

明るさと癒し系の性格で、前の部隊では人気者だった。  
むつり。

名前：植田 浩介（うえだ こうすけ）

性別：男

年齢：39

TACネーム：Kobo

階級：二佐

性格：真面目で優しい

一人称：俺

見た目：真面目そうなオツサン

設定：真面目で根はとても優しいが、鳥居にはいつも怒っている。  
鳥居といつも一緒にいる。

元々一番機だった。

ホモといじると否定するが本人はホモネタが好きである。

名前：鳥居 泰（とりい やすし）

性別：男

年齢：35

TACネーム：Nest

階級：三佐

性格：明るいムードメーカー

一人称：俺

見た目：テンション高めオッサン

設定：1番機。

いつも明るい。

皆のことを必ずタツクネームで呼ぶ。

植田といつも一緒にいる。

元々隼に乗っていたが、最近飛燕しか乗れなくなってきた。

階級が総括班長より下なのは、昇格を断っているから。統括班長と同じくホモネタが好きなインド帰り。

よくインドネタ、ホモネタでいじられている。

名前：尾島 亮治（おじま りょうじ）

性別：男

年齢：29

TACネーム：FOX

階級：一尉

性格：優しい紳士

一人称：私

見た目：紳士

設定：2番機。

キツネ大好き。

優しくまた紳士。

気の使い方が上手。

ホーカーハリケーンに乗ると実は最強。

紅茶ラブ。

キツネの事になると唐突に語り出す。

名前：坂元 悠人（さかもと ゆうと）

性別：男

年齢：24

TACネーム：PIXY

階級：一尉

性格：弄り屋

一人称：俺

見た目：成人式で警備員に止められてる人

設定：3番機。

少し関西弁が入っている。

プロスピ大好き。

伊地知といつもゲームをしている。

フライト中に皆を弄ることをスタンスとしている。

よくマジレスされている。

名前：宮本 考司（みやもと こうじ）

性別：男

年齢：35

TACネーム：T a n k

階級：三佐

性格：紳士なドM（自らの筋肉を痛めつけるという意味で）

一人称：私

見た目：マツチヨ紳士

設定：4番機。

イケボであり尾島と一緒に紳士。

普段から律儀だが、鳥居によくいじられる。

ピカイチかも知れない技量を持つが、宙返り中に性格がSに反転し

叫ぶ。

パワーは正義。

実は筋肉。

名前：船戸 裕（ふなど ゆう）

性別：男

年齢：29

TACネーム：No a h

階級：一尉

性格：ドジな微ナルシ

一人称：僕

見た目：明るい陰の者

設定：5番機。

王子様風。

見た目はカツコいいが、眼鏡を無くすなど時々ドジをする。  
纖細そうに見えて五番機の操縦は意外と荒い。  
けどキレッキレ。

よく金欠になつていてる。

1に睡眠、2に睡眠な人。

名前：伊地知 和史（いじち かずとし）

性別：男

年齢：26

TACネーム：Amaryllis

階級：一尉

性格：適当な性格

一人称：俺

見た目：自らの趣味に没頭しそうな感じ

設定：6番機。

THE 適当。

草野球とプロスピを愛し、よくバットの素振りをする。

金欠で悩むこと多々あり。

坂元とよく一緒にいる。

よく練習や任務をサボろうとしては怒られている。

名前：川村聰太（かわむら そうた）

性別：男

年齢：26

TACネーム：Specter

階級：一尉

性格：天然

一人称：僕

見た目：おつとり優しい系のちょい髪長め

設定：元第51戦術偵察飛行隊の新5番機。天然の塊。頭は何気ないが、いつもどこかズレている。実は昔5番機だつたこともある。芋Love。牧野とは昔からの付き合いであり同期。

名前：牧野夏（まきのなつ）

性別：男

年齢：26

TACネーム：Tuna

階級：二尉

性格：天然

一人称：僕

見た目：優しめのモデル体型高身長の茶髪

設定：元第51戦術偵察飛行隊の新3番機。死ぬほどイケメン。だけどツナ缶しか食べないその食生活から付き合った人にはいつも振られる。優し過ぎる。川村とは昔からの付き合い。川村と同期だが階級が違うのはとある事情がある。

## 第1話

某年某日、私：秋本 汐梨（あきもと しおり）は、南の拠点、ラバウル基地へとやつて来た。

理由としては数週間前まで遡る。

数週間前、私は、かつて所属していた部隊長に、「『第6航空団 第201飛行隊』ソニツクアローズ』へ入隊しないかというお誘いが来ている」と、唐突に告げられた。

もちろん普通の飛行隊員として隼を駆つていた私からすれば、ソニツクアローズへの入隊は、階級は変わらないが、事実上の昇進と同意だつた。

私はそのお誘いを二つ返事で引き受け、愛機であつた一式戦闘機“隼”にしばしの別れを告げ、ラバウルへの定期便へと、荷物を持って乗り込んだ。

ソニツクアローズ、通称『S A R』は、L o b i という国際的なコミニティグループで活動している、古強者：すなわち、『古参』と呼ばれる人々を集めて作られている、搭乗機として、三式戦闘機“飛燕”を使用する、アクロバットチームだ。

これまでにも様々な舞台で演目を披露しており、私も一度、この目で見たことがあつた。

感想としては圧巻の一言で、見事に整つた編隊、そしてド派手なアクロバット飛行を見せてくれていたのは、今でも脳裏によぎる。

定期便の一式陸攻から降りた私は、まず、これから所属することになるソニツクアローズの本部を探すことにした。

一体どんな人たちなのだろう…

そうワクワクしつつ、同時に、自分なんかにあんな飛行ができるのかという心配とプレッシャーが同時に襲いかかってきていた。

そんな重圧に押されながら整備員の人や基地の人などに道を訪ねていると、やがて、大きなツバメのマークに水色の背景の旗が目印の、ひとつ建物にたどり着いた。

「……が…ソニツクアローズの事務所…」

そうポツリと呟くと、重圧が緊張へと変わり、なかなか前に踏み出せずにいた。

それでも気合を入れて、その緊張を振り切つてドアノブをまわし、中へと入った。

するとそこには、2人一緒にスマホでゲームをしている人や、無言のまま筋トレをしている人、とてつもなくいい笑顔でキツネ関連の画像を漁っている人、T—2とT—4ブルーどっちが至高だと口論している人、そしてメガネメガネと言いながら自分のであろうカバンを漁っている人という、個性豊かなメンバーがそこにはいた。

「あ、あのー…こつてソニツクアローズさんで間違つてないですか…?」

そう聞くと、先程まで口論をしていた人がこちらを向き、につこりとした笑顔で、

「はい、こちらがソニツクアローズですが…あ、もしかして…新人さん?!」

と、聞いてきた。

「は、はい！秋本 汐梨 一尉、ただ今着任致しました！」

そう敬礼しながら元気よく言うと、他のことをしていた人も手を止め、こちらを興味津々見てきていた。

すると、先程口論していた別の人気が少し前まで歩いてきて、

「統括班長の植田 二佐です、ほら、お前らもしつかり挨拶する！」

と、ほかの隊員に対して怒つていた。

「えーと、1番機、隊長の鳥居です！階級は三佐！よろしくね！」

「2番機、尾島 一尉です、TACネームはFox、よろしくお願ひしますね」

「3番機、坂本つちゅーもんです、階級は一尉でTACネームはPixy、よろしくお願ひしますわ」

「4番機、副隊長の宮本 三佐です、これからよろしくお願ひしますね」

「5番機、ソロの船戸 一尉です、よろしくお願ひします」

「6番機、ソロの伊地知（いじち）一尉、よろしく。」

「入隊致しました秋本 一尉です！TACネームはTidoになります！よろしくお願ひします！」

そう全員の自己紹介が終わると、ソニツクアローズのメンバー全員が目を合わせ、全員がニッと笑つてこちらを向き、

「「「「「ようこそ、ソニツクアローズへ」「」「」」

と、少しバラバラながらも言つてきた。

まとまりは無いが仲は良いのだと言うことを感じ、私は、

「はい！これからよろしくお願ひします！」

そう言い、敬礼を返していた。

「さて、荷物整理が大まかにでも片付いたら、これから相棒を見に行こうか！」

そう割り振られた自室をノックされたと思うと、鳥居 三佐が部屋の前で満面の笑みを浮かべていた。

私は手招きして誘われるがままに後を追い、ソニツクアローズの事務所横に佇む、巨大な格納庫へとやつてきた。

中へはいると、そこには、銀色ベースに緑の迷彩模様の塗装が施され、横一列に並んだ、7機の三式戦闘機”飛燕”の姿があつた。

「わあ…カツコイイ…！」

「だろう？これがソニツクアローズの乗機の飛燕だ、秋本は今まで隼に乗つてたんだっけ？」

「は、はい！そうです、隼に乗つていました！」

「そうか、ならパワーも違うしどうしビックリするだろうな」

そう言いながら、鳥居 三佐は垂直尾翼に大きく1と書かれた機体へと手を置いていた。

その姿は、なんというか、最初のイメージとは違い、とても優しいものだった。

その姿と機体に少し見とれていると、格納庫に、先程のメンバーと整備員らしき人が、全員集まつてきていた。

「よし、秋本、これ持つて待つとけ！今からイイもん見せてやるよ！」

そう言い、鳥居 三佐は私に無線機をほおり投げ、それをキヤツチしたのを見届けてから、機体へと乗り込んで行つた。

それに続いて全員がそれぞれの番号が垂直尾翼に書かれた機体へと乗り込み、その場に残つたのは私と整備員、そして植田 二佐だけだつた。

「総員、イナーシャー回せ！」

そう植田 二佐の号令でイナーシャーが回され始め、次に、「発動機起動！」

の合図で、全ての機体のプロペラが一斉に回り始めた。

やがて、無線機からも声が聞こえ始め、私は植田 二佐の手招きで格納庫の外へと出た。

『R a b a u l t o w e r, S o n i c a r r o w s r e q  
u e s t f i e l d A c r o.』  
『S o n i c a r r o w s, R a b a u l t o w e r c l e  
a r t o f i e l d A c r o.』

そう短くやり取りを終えると、1番機から順に、滑走路へ向けてタキシングを開始した。

やがて、1番機から4番機までがダイヤモンド編隊、5、6番機が2機編隊を組み、滑走路へと綺麗に整列した。

『T a k e o f f r e a d y : n o w.』

その掛け声で、まずダイヤモンド編隊の4機がひとつずつ離陸を開始し、やがて飛行していった。

『5, 6, S t a r t m i s s i o n.』

『R o g e r, r e l e a s e b r a k e : n o w.』

その声が聞こえたと思うと、今度は2機編隊が乱れなく離陸を開始し、やがて、

『R o l l o n : L e t, s G o』

『5, L e t, s G o ! L e t, s C l i m b !』

の掛け声で、2機同時にド派手な機動を始めた。

そこからの演目は、息も忘れる程に美しく、見惚れていた。

…やがて、全ての機体が着陸した時、私の胸は興奮でいっぱいに

なつていた。  
これから、

私のアクロバット人生が、幕を開けるのだ。

## 第2話

：話は秋本がソニツクアローズに着隊する前まで遡る。

いつも通り誰よりも早く寝て遅く起きている僕：船戸は、メガネをかけ直しながら、寒空の下、ソニツクアローズの事務所へと向かつていた。

「おはようございまーす」

そう言いながら誰もいない事務所のドアを開け、事務所に備え付けられた冷蔵庫からバナナを取りだし、テレビの電源をつけて、テレビを見ていた。

すると、事務所のドアの開く音がし、その方向を向いてみると、ランニングウェアに身を包んだ、宮本 三佐の姿があつた。

「宮さん、おはようございます」

「はい、船戸さんもおはようございます…ほかの皆さんは？」

「食堂じゃないですかね？俺はコレ2本で足りるんで」

そう言いながら、僕はバナナの皮をヒラヒラと見せてから、ゴミ箱へと皮を放り投げた。

「いつもながら朝は少食ですね、では私も食堂へ行つてご飯を食べてきます」

「はーい、行つてらっしゃーい」

そう軽く手を振りながら言い、宮本 三佐が部屋から出た後、僕は薬を飲んだり、毎朝のトイレという名の長期戦闘を繰り広げたりしていると、いつの間にか時刻が0800になつていた。

そして事務所に戻ると、いつの間にか全員揃い、各自自分の好きなことをしていた。

「Noah! またトイレか、いつもながら長えなあ」

「腹が弱いんですよ…薬も飲んでるんですけどね」

「辛いのとかも食べるくせに腹弱いは笑うしかないやろ、自分で地獄見に行つてますやんか」

「好きなんだから仕方ないだろ、ねえ尾島 一尉？」

そう無理やり話を振ると、尾島 一尉はキツネを愛でる手を止め、

困惑気味にこちらを見てきた。

「そう私に振られましても…辛いもの食べてもお腹大丈夫ですし」「キツネにエキノコックスあつても好きなもんは好きですよね?」「なるほど、そういう方向ですか、確かにそうですね、好きな物は好きです」

「ですよねー！仕方ないですよねー！」

そんな会話をしていると、植田 統括班長がわざとらしく咳き込み、辺りを黙らせた。

しばらく全員の視線が植田 統括班長へと集まり、なにか喋るのを待つていると、

「……この部隊には、何が足りないと思う？」

と、膝に両肘を立てて寄りかかり、両手を口元に持つていて、割と真剣な面持ちで、全体に聞いてきた。

「どうしたんです？急に。…まあ、私はパワーかなと思いますけどね、特に馬力とかで」

「宮さん、乗るだけ無駄だよ、このオッサンの気まぐれだつて…素振りしていくるー」

そう言い、伊地知 一尉が木製バットを肩に担いで事務所から出ていき、残るはシンとした雰囲気だけだった。

「あのー、やっぱり華が足りないんじゃないですかね、隊長も統括班長もホモですし」

「おいコラP・i・x・y、俺はホモじゃねえ！俺は彼女もいるんだぞ！」

「彼女さん来た時に愛の低空ロープス勝手にしましたもんね、それで もやっぱリホモやと思いますよ」

「ホーモーはーK・o・b・oーだーけーだー！」

そう駄々をこねるように隊長が言い、統括班長がそれを睨みつけるといういつも通りの風景になりつつ、紳士組2人がまともに考え始めつつ…という、なんともカオスなムードができあがった。

「にしても華…か、少し検討しておこう、他に意見は？」

そうムードを切り替えるように統括班長が言い、僕達は再度思考に入った。

そしてしばらくすると、坂本 一尉が、  
「もう一つその事F—4ファントム乗りましょ、その方が盛り上がり  
ますよ」

と言つてきた。

「あのなあ……この世界にファントムがあると思うか？あつても〇Pな  
疾風とかだぞ？それにファンтом乗れるなら俺もF—2乗りたい」  
そうバツサリと切り捨て、僕達はまたシンとした空気に包まれた。  
「…考へても仕方ないな、なんとか出た華がないつてことを中心に改  
善策を考えるか」

「つて言つても、L o b i に女性ほど居なくないですか？まあ稀  
に見ますけど…それより飛燕のパワーを何とかしようよ、グリ  
フォンエンジンにしたりして」

「グリフロンエンジンを積むのは草しか生えないしそもそも無理で  
す」

「o h……ですよね…」

そう宮さんは言い、しょぼんとしながら、優雅に紅茶を飲み始めて  
いた。

「華…つてことは女性ですもんね…演目で補うこともできますけど…  
看板狐としてキタキツネ飼いますか？」

「エサ代がヤバいんで却下で」

「ですよね…」

「…11戦術飛行隊から誰かピックアップしてくるかあ、飛べる奴が  
いたら飛ばして、飛べないやつしかいないならアナウンスとかにして  
もいい」

そう統括班長は言うと、スマホをいじつて、関係箇所にメールを飛  
ばし始めた。

「…グダグダしてるなあ」

ここはソニックアローズ。

特に毎日ネタが起きるでもなく、こうしてグダグダしている。

### 第3話

「へ？ テレビ取材…ですか？」

そう、植田二佐の言葉に、オウム返しのように聞き返す。

「ああ、テレビ取材だ、経験はあるか？」

「いえ、無いです…あつたとしても収録してるのは見たことくらいしか…」

「だよな…今日来るんだが…どうしたもんか」

そう言つてうーん…と唸り始めた所を見ると、植田二佐はテレビ取材のオファーが来たのはいいものの、どう言つたふうに受け答えすればいいのか、わからなくなつてているようだつた。

「どうしたも何も、テキトーにやつちまえばいいんだよ…あ” “あ” “あ!” 今のアウトだろオイ!?’

「審判がセーフって言つてるんやからセーフですー！ 残念だつたな伊地知イ！」

「うつせえぞ坂本オ！ ボコボコにしたらア！」

「うるせえぞお前ら！ もうちよつと静かに出来んのか！」

「うるせえ統括ホモ長！ 隊長と仲良く掘りあつてろ！」

「誰がホモだ誰が！ ホモは鳥居だけだ！」

「誰がホモだK o b o！ 僕はホモじやねえ！」

…急にギヤーギヤーと口論が始まつたが、もはやいつも通りのソニックアローズなので特に気にならなくなつてきたあたり、私もかなり毒されてきたようだ。

「紅茶どこ…？ ここ…？」

「宮本三佐、気を確かに、紅茶ならここにありますよ

「メガネどこ…？ ここ…？」

「船戸一尉、メガネは一尉の頭の上にあります」

「コヤアア…？」

「よしよし、おやつが欲しいのかい？」

「キツネつてそう鳴くんですね…」

いつもながらに混沌としている事務所だが、今日はさらに混沌とし

てる気がしてきた。

：多分、皆さん取材が来るという事で緊張している……のだろう。

そうであつて欲しい。

やがて昼になり、全員で食事を終えた辺りで、滑走路に一式陸攻が降りてきた。

それを見るなり全員の表情に緊張が走り、各々が鏡の前で身だしなみを整えたりし始めた。

それを見て今まで緊張してしまい、私の表情が固くなるのがわかつってきた。

「…よし、記者の出迎えだ、みんな行くぞ」

そう植田二佐が言い、全員終始無言のまま、記者を出迎えに行つた。着陸した一式陸攻の元へと向かうと、中から一般の人に混じつて、大きなカメラを持つた人と、レポーターのような人が降りてきていた。

「モリテレビの保森 域杉と申します、本日はよろしくお願ひします」「ソニックアローズ統括班長の植田二佐であります、こちらこそ本日はよろしくお願ひします」

そう言つて植田二佐が敬礼し、それに続いて私たちも敬礼する。

やがて植田二佐主体での取材が始まり、私たちはそれを少し離れたところで見る事になった。

「あははっ、植田二佐めっちゃ緊張してますやん、表情が固まりっぱなしですよ」

「これは今晩それでいじりつつ酒だな、伊地知の奢りで」

「なんで俺なんだよ！そこは隊長であるアンタでしょ！」

そんな会話を聞きながら取材を見ていると、今は飛燕の説明に入つたところだった。

先程までの表情とは打つて変わつて、とても楽しそうに説明しているあたり、本当に飛燕が好きなのだと感じることが出来た。

やがて説明が終わり、植田二佐がこちらに駆け寄つてきたと思ふと、

「よし、お前ら早く自分の機体に乗り込め！いくつか演技するぞ！」

と、言つてきた。

「え？ 今から？ K o b o 、今からつて言つた？」

「ああ、今からだ、今晚酒奢るから！ な！ あきもつちやんはまだTRだからお留守番だ！」

そう言つて無理やり機体に乗せられていく先輩たちを見て、少し同情しつつ、私は植田二佐について行くことになった。

「これより、第6航空団、第201飛行隊、ソニツクアローズの飛行展示を行います、彼らの勇姿を、どうぞご覧下さい！」

そう植田二佐がマイクを持つて言うと、我らがソニツクアローズの飛燕が6機、滑走路へと一糸乱れぬ動きでタキシングして行つた。

それを見てレポーターとカメラマンの人々が「おお…！」と興奮気味に言つたことにテンションが上がつたのか、植田二佐は、無線機をタキシング中の飛燕の無線に合わせると、

「よし、第1区分行つてみよー！」

と、先程言つていたこととは違う発言をしていた。

『はあ!? K o b o 、さつきはいくつかの機動飛行つて――』

そう鳥居三佐が反論してくると、何も言わずに飛燕の方向へ向かいサムズアップし、無線の周波数を変え、反論できないようにしていた。うわあ…この統括班長、鬼だ……

そう思わずにはいられなかつた。

（）

（）

（）

『あーもう！ 無線切りやがつたK o b o のやつ！』

『これはもう第1区分するしかないですね…どうします？ N e s t ?』

『これはもうやるしかないでしようねえ、やらんとどうせ後々めんどくさいですよアレ』

『それは否定出来ないです…N e s t 、仕方ないんで第1区分りますか』

『T a n k が言うなら…やるしかないかあ、N o a h とA m a r y l

l i sもそれでいいか?』

『こちらA r r o w 5、隊長に任せます』

『俺はめんどくさいんでもう適当に任せます』

『はあ：了解、第1区分やるぞ』

そう隊長が言うと、全員でいつものフォーメーションに滑走路で並び、コールを待つた。

『T h r o t t l e 90, f l a p s 0, t a k e o f f  
r e a d y:: n o w!』

その掛け声で、前方の4機が離陸滑走を開始し、やがて宙に浮く。そして右旋回に入つたところで、

『5, 6 s t a r t m i s s i o n!』

と無線が入り、僕たちもスロットルを最大まで入れ、離陸を開始した。

（　　）

「はあ……つつかれた…1区分やるなら事前に言つといて欲しいですわ」  
「備つてもんがあるんだよ…」

「それ、そもそも飛ぶとも聞かされてねえしよ…めんどくさかつた…」

「ホンマにそれですよ、飛ぶんなら事前に言つといて欲しいですわ」  
「まあまあ、だから俺が奢つてやるんだからさ、まあ飲めつて」「「絶対破産させてやる…」」

そう言つて、隊長と伊地知一尉、坂本一尉はガブガブとお酒を飲み、料理を頼んでは食べていた。

対して尾島一尉と宮本三佐は優雅に紳士っぷりを発揮しながらお酒とおつまみを食べ、船戸一尉はマイペースにお酒とおつまみを黙々と食べていた。

## 第4話

「～～♪」

そう私は鼻歌を歌いながら、乗機である飛燕の清掃をしていた。  
今日は隊長の発案で、統括班長である植田二佐に、サプライズがあり  
がとうパーティーをすることになったのだ。

そのために今、隊長と副隊長である鳥居三佐と宮本三佐が花束を買  
いに出ており、ターゲットの植田二佐は今、基地司令と会議中だ。  
そんな今、何故私……と尾島一尉と船戸一尉で飛燕の清掃をしてい  
るかと言うと、どうせならサプライズ後に我らが乗機である飛燕の前  
で写真を撮ろうという話になつたからである。

「ふう、この辺でいいでしょう、そろそろ隊長たちが帰つてくるはずで  
す」

そう首筋にキツネを乗せたまま清掃をしていた尾島一尉が清掃  
を終えて、紅茶を入れてくれた。

「流石、元R A Fの英國機乗り、紅茶の腕がいいですね…僕なんてイン  
スタントコーヒーとかの樂に作れるのしか作れないのに」

「またまたご謙遜を、船戸一尉の容れる緑茶も美味しいですよ」

「あれは元の茶葉がいいんですよ、僕はただお湯を注いでるだけです  
…ところで伊地知さんと坂本さんは？ いつの間にか清掃せずに居な  
くなつてましたけど」

「ああ、彼らなら向こうでキャッチボールをしてましたよ、それはもう  
楽しそうに罵倒し合いながら」

「ば、罵倒し合いながらですか……」

「そう少し引き気味に私が言うと、2人は軽く笑つて、

「だつてあの一人ですよ？ 喧嘩するほど、と言つやつです」

「ですね、よく飛びながらも3番と6番は喧嘩…というか野球の話を  
しますし、仲は悪くないですからね」

そう言われ、「確かに」と思わず口を得なかつた。

まあ、その中でも口論の絶えないのは1番機である鳥居三佐と3番

機の坂本一尉なのだが。

…まあ、なんだかんだ言つて仲はいいのだろう。

多分。

「さ、そろそろ時間ですね、事務所の飾り付けもしちゃいましょう」

「ですね、秋本さん、デザインの監修は任せましたよ」

「ええ!? 私ですか!?

「はい、私たちよりも多分センス良さそうなので」

そう無茶ぶりを振られ、私はビックリしながらも、与えられた仕事をこなすことにした。

数分後、そこには綺麗に飾られた事務所と、クラッカーに驚いて固まる、植田二佐の姿があった。

「え？・え？・なにこれ？・え？」

そう困惑し続いている植田二佐を見て全員で笑いながら、隊長から順に、一言づつお礼の言葉を送り始めた。

「もうかれこれ5年は一緒に飛んでるな、いやー、時が経つのは早い早い。K o b o から隊長職を引き継いだソニアロはこれからもしつかり運営していく、これからもよろしくな！」

「ソニックアローズ5年目、おめでとうございます。これからも辛いことなどがあるでしょうが、頑張ってください、応援します」

「頑張つてもつと認知される部隊にしてくださいよ、応援してるんで」「柵外から見るようなアクロ部隊とは違つて拍子抜けしたかも知れませんが、これからも隊員と仲良く『クソ喰らえ!』の精神で頑張つてください」

「統括班長の職務は大変でしょうが、これからも頑張つてください、大変な時は隊員もバックアップします」

「かれこれソニアロは5年も続いてる。これからも辛いことはあるだろうが意地でも耐える。辛くなつたら仲間である俺たちを頼れ。そうすれば大丈夫だから!」

そう1番機から6番機の皆さんとの言葉が終わり、私の番となつた。

正直、ソニックアローズに来てまだ日も浅いので皆さんよりも浅いお札になるが、しつかり言葉を選び、脳内で文章を作つていた。

「えーと……私はまだソニックアローズに来て日も浅く、まだまだ未熟ですが、統括班長の植田二佐を始めとする皆さんのお陰でなんとかここまで来れます、ありがとうございます！」

そう言つてお辞儀をすると、どこからともなく笑いが起きた。

少し困惑していると、鳥居三佐が、

「全員に向けてのお礼の言葉か、T i d oらしいな！」

と、言つてきた。

そこでさつきの自分の言葉を思い返してみると、確かに統括班長向けと言うよりは、ソニックアローズの皆さんへ向けた言葉だつたことに気づき、少し顔が熱くなるのがわかつた。

「さて！じゃあT a n k ! 花束を！」

そう鳥居三佐が言い、宮本三佐が奥の方から花束を持つて来た。

そしてそれを植田二佐に渡すと、植田二佐が、

「…ありがとう、お前らのおかげでここまで来れてる、これからもよろしくな！」

と、言つてきた。

その後は言わずもがな、缶ビールや日本酒での飲み会が始まり、これがこの人たちの最大の照れ隠しなんだな、と思わされた。

## 第5話

ある日、私はその日休暇となり、暇を持て余していた。

ラバウルに来て数ヶ月は経つたはずだが、この辺についてよく知らないので周辺を探検：とも思つたのだが、結局、飛行訓練も兼ねて隊長に許可を取り、飛燕に乗つて周りを見回すこととした。

離陸準備を終え、演目時や訓練とは違ひフラップを50%まで下ろし、タワーと交信して離陸許可を貰う。

貰つたあと滑走路へ進入し、スロットルを一気に100%に上げた。

離陸滑走をし、空へと羽ばたき、基地を後にする。

そして高度を500辺りまで上げ、背面機動を織り交ぜたりしながら、綺麗な街を眺めていた。

いくつか気になる場所を見つけ、地図を片手に覚えながら、私はそろそろ戻ろうかとタワーと交信していた。

『Rabaull tower, Tido request land  
d i n g.』

『Tido Rabaull tower can, t l a n d i n  
g. Please wait about 10 minute  
s and take the distance from R  
a b a u l base.』

「え…？」

そう困惑しつつも指示された通りに距離をとる。

燃料はまだまだ大丈夫だが、ラバウルで何があつたのだろう。

そう思い、ポケットから单眼鏡を取り出してラバウルを見てみると、滑走路に、2機の飛燕がエシユロン隊形で止まつていた。垂直尾翼を見るに、船戸一尉と伊地知一尉のようだ。

もしかしたらいつも訓練で使つている回線で何か聴けるかもしない、そう思つて無線回線を合わせると、やはり、2人の声が聞こえてきた。

『船戸さん船戸さん、これ終わつたらV T u b e r の配信見ません？』

丁度俺の最推しが終わる頃に配信するんですよ』

『いいですよ、あ、でも僕は別の人への配信見ますね、丁度僕の推しが配信するんで』

『いいですねえ、早く終わらせてコーラキメながらてえてえ観賞といきますか！』

『ですね、じゃあ行きますよ……Release brake, no w.』

その声で飛燕が動き始め、やがてローラングルキュー・バン&ロールオンテイクオフが始まった。

なるほど、ラバウル基地に近づいては行けないのは5、6番機の自練があつたからのようだ。

：やがてコークスクリュー、5、6番機のソニアロオリジナル技、タッククロスブレイクが終わり、いつもなら着陸という所まで来た。空から見る5、6番機の演技のダイナミックさに圧倒されていた私だつたが、やはり1時間以上飛行しているとあつて、そろそろ休憩が欲しくなつていた。

やつと着陸できる、そう思つていると、2機の飛燕はギアを下ろそうとせず、編隊を組み直して海の方向から滑走路へ、高度を下げずに進入してきた。

「あれ？まだ着陸しないのかな…」

そう呟いた時、無線から『ん？』と声が聞こえてきた。

もしかすると、マイクがオンになつていて聞こえてしまつたのかもしない、そう少し罪悪感に包まれていると、無線から、

『……ああ、今の声は秋本さんですか、我々の演技、どうでした？』

と、船戸一尉の声が聞こえてきた。

「あはは…すみません、聞こえちゃつてましたか……素晴らしいかったです、流石でした」

『ありがとうございます、我々も自主練してる甲斐があります。伊地知さん、一度ロープスして折り返してからやりますか』

『了解です、丁度いいや、秋本さん、見といてくれませんか？』

「え？何をですか？」

『新技…ですかね、まだ練習中ですが』  
「了解です！ぜひ見させてください！」

『了解、5 turning base.』

そうローパスをした2機は折り返し、再び滑走路へと並行に進入してきました。

『ポンントンロール、Ready…now』

その一言で、2機の飛燕が同時に乱れることなくロールをした。

「おお…キレイ…」

『どうでした？今のは上手くできた気がするんですが』  
「凄かつたです！タイミングもバツチリでした！」

『それは良かつた…さ、船戸さん、早く着陸して配信見ましょ』  
『ですね…あー、でも先に秋本さんに降りてもらいましょう、燃料も減つてるでしょうし、なによりフライト時間が僕たちより長いですし』

『あー…仕方ない、先に降りてください』

『了解です！ありがとうございます！』

そう言い、私は滑走路へと降り、タキシングして格納庫へと飛燕を納めた。

その後に2機の飛燕が編隊着陸をし、2人とも降りて來た。  
……その後、こつてりとVTuberについて語られ、その沼に嵌められたのは別のお話。

## 第6話

某日、僕たちはラバウルに向け、地形偵察任務を行うことになつていた。

「Track tower, Lark 02 request take off.」

『Lark 02, Track tower, cleared to take off. Good day.』

「Good day. さて、牧野、ラバウルまで出発しようか」「Roger that. でもなんで地形偵察任務なのにこんなにも荷物積んでるの?」

「…上の人たちがついでに積んだけって」

「そつかー…」

そんな事を言いながら、僕たちはラバウルまでの進路を取つた。

「プレイボール!」

そう審判の声と試合開始のサイレンの代理として空襲サイレンが響き、私たちは試合を始めた。

試合というのも、今日は業務時間中に、飛行要員と整備士の人たちとの親睦を深めるため、伊地知一尉と坂本一尉の提案で、野球をする事になつたのだ。

正直業務時間中にするのはどうかと思つたが、統括班長と隊長が「いつもの事だからへーきへーき!」と、満面の笑みで言つてきた。なら大丈夫なのだろうと思い私も野球に参加しているのだが、野球なんてやつた事がないので、まともにボールは投げても届かないし、バットにボールも当たらなかつた。

まあ他の人たちも似たようなもので、伊地知一尉と坂本一尉のせいで慣れている他のソニアロの人たち以外はあまり打てていなかつた。やがて8回裏あたりに差し掛かった頃、上空を1機の一式陸攻が飛

行して行き、それを目で追いかけていると、カアンといい音と共に、私の視界にボールが入ってきた。

「あきもつちゃん！そつち行つたぞ！」

「え、あ、はい！」

そう言いながら、私はフライボールを取るために構え、着弾点を予測しながら後退して行つた。

そしてキヤツチしようとした時、唐突に風が吹き、ボールを流してしまい、そのままボールが私の顔へとクリーンヒットしてしまつた。

「いいいいつたあ…………！」

そう言つて顔を抑えてしゃがみこんでいる私、近くに落ちたボールを投げ、ランナーをアウトにした尾島一尉が、私の肩を叩いて、「大丈夫ですか？」

と、声をかけてくれた。

「は、はい……大丈夫です…………」

「ならよかつたです、ランナーはアウトにしておきましたので、ミスは気にしないでください」

「ありがとうございます、助かりました」

そう会話を交わし、その回を終えてチエンジし、1点を追う形で私たちの攻撃が始まつた。

バッターは鳥居三佐だ。

「ストゥウウラライイイイイイイイクツ！トゥー！」

「クソつ！当たんねえ！」

「ストゥウウラライイイイイイイクツ！バッターアウツツツツツ！」

そう三球すべて空振り、次は伊地知一尉の番になつた。

初球でカキンといい音をたてて一尉はボールを打ち返すと、ボールはそのまま森の中へと飛んで行き、文句なしのホームランとなつた。

続いて宮本三佐の番になると、今度はその伊地知一尉の打球を遥かに超えるホームランが放たれ、試合はそのまま勝利に終わつた。

「はああ……なんであのタイミングで2人ともホームラン打てるんだよ

：：俺は空振りなのに」

「練習の違いでしょ」

「パワーの違いですかね」

そう鳥居三佐は軽く返答され、そつかー……と言つてうなだれてい  
た。

どうやらいい所を持つていかれたのが相当悔しいらしい。

そんな鳥居三佐を見て苦笑いしつつ、私はさつきから感想戦を繰り  
広げている植田二佐と尾島一尉、船戸一尉の話を聞いていた。

「いやあ……秋本さんがフライボールを顔面ヒットした時は墨に出られ  
ると思いましたが何とかなるものですね、あのランナーの驚愕した顔  
は実に愉快でした」

「ああ……それは愉快ですね、僕もピッチャーやつて打たれた時はあ  
ちゃーって思いましたがアウトになってるのを見て愉悦に浸つてしま  
した」

「俺も3塁守つてたが、挟撃ができた時は実に楽しかったな、思わず笑  
いが出ちました」

「ああ、伊地知さんと一緒にニツコニコの笑顔で追いかけてましたね、  
アレは楽しそうでした」

そんな会話を聞いて更に苦笑いしていると、それに気づいた宮本三  
佐が声をかけてきた。

「どうしました？さつきから濃いカフェイン泥水を飲まされたような  
顔をして……」

「い、いえ……なんでもないです……」

そう私が言うと、見ていた方向を見て察したのか、宮本三佐はあ  
あ……と言いつ

「2、4、5、6、統括班長はドSで有名ですからね、統括班長はドM  
も極めていますが」

「え、ええ……」

そんな会話をしていると、事務所のドアがノックされ、多くの荷物

を持った2人のパイロットがやってきた。

「おお！川村に牧野じゃないか！久しぶりだな！」

そう植田二佐が言い、その2人の元へと歩み寄つていった。

どうやら、顔見知りのようだ。

「お久しぶりです、偵察任務のついでに輸送を頼まれまして。その物品を渡していくところなんですよ、はいこれ植田二佐の注文してたカメラのレンズと、尾島一尉の注文してた狐のご飯です、その他物品は牧野の持つてるダンボールに入つてます」

「おお、助かる」

そう植田二佐が言うと、そのまま3人で雑談を始めてしまつた。

「あのー、船戸一尉、あの2人はご存知ですか……？」

「いや、よくは知らないんですけど、川村さんは先代の5番機として活躍してたつて聞きました。尾島さん、牧野さんは知つてたりします？」

「いやあ、知らないですね……話を聞いてる感じ、ラバウル所属のパイロットだつたっぽいですが」

そんな会話をしながら船戸一尉と尾島一尉は伊地知一尉の方をじーっと見ていた。

「え？ 何？ なんで俺じーっと見られてんの？」

「だつてソニアロ歴長いから……」

「いやそうだけどなんで俺……？」

「近くにいたから……」

そう私除く3人で軽く会話をした後、伊地知一尉はあの2人について教えてくれた。

どうやら問題を起こして偵察部隊に飛ばされた問題児らしい。

その問題の内容は忘れたそしだが、そもそもその2人の説明を伊地知一尉がしてくれた頃には尾島一尉は狐のご飯を受け取りに、船戸一尉は注文してた次世代電動ガンが届いたと聞いてテンションが上がつて私以外誰も聞いていなかつた。

……最近伊地知一尉の扱いが雑くなつてる気がするのは私だけだろうか。

そんな事を思つていると、植田二佐に電話がかかり、植田二佐は真剣そうに誰かと通話していた。

「…はい、わかりました、ではこれで失礼します。…おい！ソニアロ全員集合！川村と牧野にも関係がある！」

そう植田二佐から号令がかかり、何事かと思っていると、植田二佐は1つ咳き込んでから、

「運営本部から重要な内容が伝えられた。3ヶ月後、ソニアロは大規模なメンバー変更が行われることとなつた」

そう植田二佐が言つていると、事務所にFAXが届いた。

植田二佐はそれを確認すると、その内容をみんなに見せてきた。

「植田二佐がアグレッサー部隊隊長に配置替え…んで僕が次期統括班長！」

「なんで！俺は！11戦隊に！移動なの！」

「まだ一年目なのと11戦隊の戦術教官がアグレッサーを兼任しててな、今回のアグレッサー教官大量辞任で辞めていつたんだ、だからまだアクロに染まりきつてない腕利きが必要とされたんだ」

「僕と牧野がソニアロに…？でも戦闘機資格剥奪されますよ？」

「ああ、だからソニアロに入るまでの1ヶ月で再取得、配属されてから2ヶ月で試験に合格すればOR取得になる」

「ちよつと待つてください、僕なんかより伊地知さんとか副隊長とかの方がソニアロ歴長いし統括班長適任だと思うんですけど」

「6番機の代わりがすぐ見つかなかつたのと、副隊長は安全班長も兼任してくるからな、役職が多すぎるんだ」

そう質問攻めを受けても植田二佐は難なく返し、困惑は残るもの、全員納得し、静かになつた。

「あのー、なんで急にアグレッサー教官が大量辞任したんですか？」

そう私は疑問に思つたことを聞いてみると、植田二佐は苦笑いして、

「……ああ、とある新参部隊の教練に出向いてたらしいんだけどな、言う事聞かないわすぐ暴言吐くわその部隊長に訓練内容伝えても全然隊員には行き届いてないわそれ以外にも様々な問題が起きて精神的にキたらしい」

と、教えてくれた。

「アグレッサー教官が精神的にクルつてどれだけなんですか……」

「……さあな」

そうなんとも言えない空氣の中、私たちは新たな門出を迎えることになってしまった。

## 第7話

あの唐突な人事異動事件から2ヶ月後、川村一尉と牧野二尉は戦闘機資格を再取得し、TRとして飛行訓練を行っていた。

2ヶ月でORへと移行する予定とあって、訓練の時間は増え、5番機の訓練に至っては業務時間外でも現5、6番機2人による直々の訓練が行われるなど、気合の入りっぷりはすごいものだつた。

そんなある日、流石に連日飛び続けて体力の消耗や精神面での疲労で事故が起きてからでは遅いところで、5日間の連休が与えられた。

基地の外に出てゆつくりしてもよし、基地にこもつて好きなことをしてもよしという事で、私は連休初日の午前中に行きたいところをメモして、基地周辺の探索を行うことにした。

2日目と3日目は宿舎でゆつくり過ごし、4日目はショッピングへ、5日目は行きつけのスイーツショップでスイーツを買い、家で満喫していた。

そして連休も明け、事務所で飛行前のブリーフィングをしていると、放送がかかり、川村一尉と牧野二尉の名前が呼ばれ、今すぐに基地司令室へ来いという事だつた。

全員がまたなんかやらかしたのか…と呆れて2人が帰つてくるのを待つていると、戻ってきた2人は大きなダンボールをそれぞれ1つづつ抱えて帰ってきた。

「川村に牧野…なんだそのダンボールは？ つてか何やらかしたんだ？」

「いや…僕らも記憶になくて内心ドキドキしながら行つたんですけど…」

「なんか…感謝状とそのお礼…？ を貰いました」

「うんごめん、状況が理解できない、何があつた？」

そう鳥居三佐が言うと、2人は順を追つて説明してくれた。

「……つまり、川村は直売所に行つて買った芋があまり美味しくなかつたから農家に凸していい作り方を教えたたら通常よりも成長速度や美味しさが段違いの芋ができてすつごい儲かつたからそのお礼に芋を10kg貰い、牧野はそこで買ったツナ缶があまり美味しいなかつたからそのツナ缶を加工したマグロ加工業者に行つて色々い調理方法やらなんやらを教えたらツナ缶やらの加工食品がすつごい売れて儲かつたからそのお礼にツナ缶1年分を貰つた……と？」

「そういう事です！」

「理由はすつげえ酷いのにすつげえ貢献しててもう笑うしかないんだけど」

そう鳥居三佐がツッコんだ後、とりあえずブリーフィングを再開し、飛行訓練を開始した。

一通り終えて着陸した後、私たちは業務終了時間まで、雑談して過ごすことになった。

最初は今回の訓練の感想戦のようだつたが、次第に、今回の連休をどう過ごしたかに変わつていつた。

「…つて感じで、私はずつとゆっくりやりたいことしてました。あ、訓練後にみんなで食べようと思つてケーキ買つてきてますよ！業務終了したらみんなで食べましょ！」

「良いですね、なら私はそれに合いそうな紅茶を淹れるとしましそうか」

「ありがとうございます！あ、宮本三佐はこの連休、何してたんですか？」

「私ですか？私は船戸さんと水上機に乗つてショートランド泊地へ行つた後、ショートランドの自然に包まれながらずつとキャンプしてました」

「キャンプですか？いいですね！どんな事をしたんですか？」

「そう私が聞くと、船戸一尉が、

「まず瑞雲2機に乗つて向かつたんですけど、ショートランド泊地に置かせてもらつてあつたテントセットを持つて宛もなく山をさ迷つたんですよ」

「え？ 宛もなく…ですか？」

「…」でもう雲行きが怪しいが、そう聞き返すと、船戸一尉はさも当然と言つたような感じで「ええ、そうです」と答え、

「そこから程よく道も忘れた頃に水源を探しましたね、持ってきてる水は水筒1つ分でしたから。ねえ宮さん？」

「ですね、何気にそれが大変でしたよね、前回とは別のところを進みましたし、程よい川がなかつたんですよ」

「え？ キャンプなのに水筒1つ分…ですか？」

「ええ、水は自給自足できますから」

「もちろん食料も最低限ですよ、自給自足できますからね」

「…」もはやキャンプと言つていいのかわからない発言を聞き、困惑していると、それに続いて宮本三佐が、

「そこから程よい川を見つけてそこをキャンプ地にしまして。燃えるものを集めてパラコードを解いて火種にしてファイヤースターターで火を起こして水を蒸留して飲めるようにしたんですよ」

「あとは持ってきてたHK416で現地生物をハンティングしまして…後はそれを解体して…」

「最低限の調味料で調理して、持ってきてたお酒をキメて楽しみましたね、確かに…3日間くらいでしたつけ」

「ですね、最終日は家でゆっくりするため早めに帰路につきましたね」

「それは最早サバイバルなのでは……？」

「…」そう私が尋ねると、2人はキヨトンとして、

「え？ 楽しかったのでキャンプですよ？」  
と、答えてきた。

「もうなんでもアリなのがもしけない。」

「また2人はキャンプ行つてきてたのか、お土産とかはあるのか？」

「…」そうニヤニヤした表情で鳥居三佐は言うと、船戸一尉がは…とため息をついてから、

「…」そう言つて持つて帰つてきましたよ、はい、イノシシの干し肉です」

「干し肉!? 干し肉かあ……」

「手作りするのめんどくさかつたんですかからね? 何かあるだけありがたいと思つてください」

「アッハイ……」

そういういつも通り鳥居三佐が軽くあしらわれているのを見つつ、今日の業務は終了した。

## 第8話

「おっはようございまーす！」

そう言つて私は事務所のドアを開ける。

そこにはいつもならいるはずの尾島一尉と宮本三佐の姿がなく、珍しく私が1番だつた。

珍しい事もあるもんだ、そう思つていると、ガチャリとドアが開き、知らない女性が2人入つてきた。

「……あれ？ どなたですか？」

そう私が聞くと、2人はポカンとした顔をして、

「え？ 何言つてるんですか秋本さん、尾島と宮本ですよ？」

「こんこーん！」

そうおっぱいのついたイケメンと糸目のおつとり系の女の子は言い、私の脳内は混乱でいっぱいになつていた。

え？ 私の知つてる2人は女性だつた？ え？

そうSAN値がチェックされそうな場面に出くわし、夢では無いのかとほっぺたをつねる。

しかし、帰つてくるのは鈍い痛みだけで、私の意識は夢ではないんじゃないの？ と現実を突きつけてきた。

「だーかーら！ T—2ブルーの方がエロいの！ あの演技見ただけでもうびしょ濡れよ！」

「いーやT—4ブルーだね！ あのかわいい機体から行われるエロい演技がいいんじやん！」

そんな会話が聞こえてきたと思いドアの方を見てみると、中学生くらいの女の子と高校生くらいの女の子が、口論しながら事務所に入ってきた。

「そーだあきもつちゃんに決めてもらえばいいじやん！ ねえねえあきもつちゃん、T—2ブルーとT—4ブルーどっちが好き？」

「え、えーと……お2人はどちら様で……？」

そう私が尋ねると、2人はお上品とは言えそうにない笑い方をする

と、

「あたしは鳥居！んでこのわからずやが植田！忘れちゃつたの？」

「誰がわからずやだこの逆レ魔！うちの言う事に間違はないの！」

「誰が逆レ魔だ！この”元”統括班長が！」

「まだ引き継ぎ書類作つてゐるだけで元じゃないですーだ！」

そう2人は口論を再開すると、そのままソファに座つて論議を始めた。

「ああ…また2人やつてるよ…」

そう声が聞こえたと思うと、ドアを開けて入つてきたアホ毛の生えた中学生くらいの女の子がいた。

「あ、秋本さんおはようございます」

「お、おはようございます…えーと……どなた様で……？」

「え？ボクはボクですよ？船戸です」

もうダメだ、今日来てから何かがおかしい。

あれ？私が知つてる皆さんは男性だつたはず……

いつも皆さんから美少女と呼ばれて最近それにしつくり来てしまつてゐる伊地知一尉や川村一尉、最近近大マグロの生まれ変わり説が出てきた牧野二尉や最近転属書類を死んだような顔で書いてる坂元一尉たちは大丈夫……だと信じたい。

そう希望を持つて雑談していると、どうやら中身は変わつていならしく、会話自体は難なくできた。

……ただ、見た目と声、そして喋り方に激しい違和感を感じるため、常に脳内は混乱しつぱなしだ。

混乱しつつも会話を続けていると、船戸一尉が、こんなことを言い出した。

「ああそうだ宮さん、今日夢に宮さん出てきたんですよ」

「船戸さんの夢にですか？どんなことしてました？」

「ワ○ピースのフ○ンキームみたいな角張つた人間を超越した筋肉で陸軍のゴリマツチヨエリートたちと1 v s 1-1のサッカーしてました」「どんな夢みてるんですかそれ w w w」

そうなんとも摩訶不思議な会話を聞いて頭の中が？ばつかりにな

りつつ、私は訓練開始まで時間を潰していた。

やがて私が来てから1時間ほど経った頃、何やら声が聞こえてきた。

「いつけなーい！ 遅刻遅刻う！ 朝にツナ缶6つも開けるんじやなかつた！」

「遅刻だあああ！ でも今日もじやがいもはうめえ！ やべえじやがいもうめえ！」

ああ、例の2人か…そう思つてドアの方向を見ると、2人同時にドアを開けようとしたのか、激しい衝突音がした。

心配になりドアを開けてみると、そこには2人の、高校生くらいの女の子がいた。

しかも周りにはツナ缶とラップで包まれた蒸かしたじやがいもまで転がっている始末だ。

嫌でもこの2人が誰かわかる。

しかも黒髪ボブの女の子はツナ缶を抱え、黒髪ショートの女の子はじやがいもを咥えている。

余計に誰かがわかつてしまう。

「あ、あのー……大丈夫ですか……？」

「な、なんとか……ってあれ……？」

「私たち……」

「入れ替わってる!?」

そう驚く2人を白い目で見つつ、

「いやいやいや、そんな事あります？」

と尋ねると、

「え？ないよ？」

「やつぱりこの状況だとお約束だよね！」

と、すがすがしい程の笑顔を向けられた。

もうやだ。帰りたい。

そうだ、購買を行つて訓練開始まで時間を稼ごう。

他のところなら大丈夫のはずだ。

そうい、財布を持つて購買に向かう道中、私たちの飛燕を整備し

ている整備士の人々、ラバウル基地に所属する他の人々、どの人々も女性になつてゐる事に気づいた。

でも購買のおばちゃんなら大丈夫なはず……！

そう希望を持つて購買へ向かうと、固定資産税がかかつてそな筋肉の、おじちゃんが現れた。

「いらっしゃい、どれが欲しいの？」

そう大塚〇夫さんばかりのイケボで尋ねられ、少し戸惑いつつも、いつも買う飲み物と唐揚げを買う。

そして商品を受け取り、戸惑いが続いたまま、事務所へと戻る。  
……逆効果だった。

混乱が解けるどころか混乱がさらに大きくなつてしまつた。

そうしてなんやかんやブリーフィングが始まると、とてもダルそくな、1人の美人なお姉さんが入ってきた。

しかも、私より、遙かに、デカい。

今までの隊員の皆さんだと、私と同じくらいかそれ以下、もしくは少し大きい程度だったのだが、この人は違う。  
デカいし美人だ。

「ちよつと、遅いよ伊地知！やつと来たの！」

「ああ～…眠い……今日休んでいい……？」

「だーめーだ！ほら、さつきどブリーフィングする！」

もうムリ。訳わかんない。

そう思つた時、私の意識は途絶えた。

（）

（）

（）

「……はっ！」

そう私は飛び起きると、そこは終業時間までもう少しの事務所だつた。

…もしかして、今の今まで気絶していたのだろうか。

そう思つて申し訳なくなり、誰か周りにいないかと周りを見回す

と、そこにはいつも通りT—4ブルーかT—2ブルー、どちらがいいか議論している男性が2人。

キツネの画像を漁つてとてつもなくいい笑顔を浮かべている男性が1人。

共にH K 4 1 6 やA N — 9 4 のエアガンを触つて良さを語り合つている男性が2人。

野球のゲームをして騒いでいる男性が2人。

蒸かしたじやがいもを食べている男性とツナ缶を食べている男性がなにやら楽しそうに会話をしている。

いつもの事務所だ。

という事は、あれは夢だつたのだろうか。

そう思つていると、起きた私に気づいた船戸一尉と宮本三佐が、私に声をかけてきた。

「よく寝てましたね、まあ今日の訓練は厳しかつたのでそりやそうでしょうけど

「ですねえ、まあ若干うなされてた気がしますけど…何かあつたんですけど?

「い、いえ……ちよつとした悪夢を……」

「ああ、楽しそうですね、僕なんて最近頭おかしい程のマツチヨになつた僕と宮さんとでミリタリーエリートマツチヨたちとサッカーした夢くらいしか面白い夢見てないですよ」

「あははっ、とんでもない夢ですね」

そんな会話をしながら、私はいつも通りの日常に、少し喜びを感じていた。